

## アイヌ玉と琉球玉ー「交易による蓄積」と「下賜による沈潜」

加納 弘勝

はじめに

最初に出会ったアイヌ玉は、7年ほど前ネット販売経由の青いガラス玉で、孔には剥離剤が残っていた。その後、北海道在住の収集家経由でホンモノのアイヌ玉に「出会えた」（加納，2011，p. 5）。アイヌ玉の文化財保護機関には、「函館市北方民族資料館」（資料館と略）やアイヌ文化振興・研究推進機構（札幌市）などがあり、前者はタマサイ（アイヌ玉の連、シトキも含む）約500点を収蔵し、155連を掲載する（資料館、2007）。早大考古資料館は、11連のタマサイを公開している（谷・工藤，1997）。東京国立博物館も、『図版目録アイヌ民族資料編』でタマサイ11連と、青の小玉「樺太玉」の連（ほぼ100玉）3連を掲載する（同博物館，p. 40）。アイヌ玉は広く知られ、公的機関や個人に「集積」された玉といえよう。

「琉球玉」には、2013年春に初めて会った。沖縄の浦沿市美術館で学芸員の示した「展示会図版」には、スズ製瓶をガラス小玉で被った「御玉貫」（おたますき）があった（同美術館ネット参照）。収蔵する首里城公園を訪ねると修復中であったが、ガラス小玉の容器、「六角瑠璃玉蓋」が展示され、琉球玉が「あった」。同管理センター所蔵の『沖縄のガラス・玉類製品関係資料報告書』（『報告書』と略）には、琉球時代のガラス小玉細工や勾玉が掲載されていた。

琉球玉を文化財保護する機関は、首里城記念館など県内公的機関9つで、久米島文化センターなどに分散し、県内個人17人、県外の個人を含めて約30である（『報告書』，p. 5）。那覇の骨董商も扱った琉球玉の連は数例にすぎず、今日、これら琉球玉は入手不可能と言う。他方、島で製作された7～8個の勾玉は有し、島製作の水晶製勾玉に出会った。典型的な勾玉（後述）と比較し、異形の勾玉であった（図

版⑩ [図版写真の番号、{①～⑥}はガラスの種類、図2参照]）。双方から穴を穿った、20世紀前半のガラス玉にも出会った（図版⑩左2つ）。

琉球玉と勾玉には、このようにアクセスに違いがあった。海で沖縄が繋がる東南アジア地域は、朽ちることのないビーズは「力や永久の源」で（加納，2005，p. 31）、護符の力をもつビーズ文化の世界である。ジャワやフィリピンでも古いビーズが多数あり、台湾では先住民、高砂族はベネチア玉などを繋げたラインを8本ほど並べた首飾りを愛用し（谷一・工藤，p. 61）、貝を並べた首飾り（図版⑩）をつけた。こうしたビーズの地域的広がりを考えれば、沖縄で勾玉よりもガラス小玉の琉球玉があつてよい。しかし、琉球玉はほとんど知られない、「沈潜」した玉といえよう。

「地域研究序説」で主唱したように、二つの「文化的なモノ」、すなわち、「集積」するアイヌ玉と「沈潜」する琉球玉にはそれぞれ願いと地域の広がりが凝縮され、アイヌ玉、琉球玉、そして勾玉を、「比較社会論」で主唱したように、図解をもとに検討することで、「日本のビーズ」に「隠された論理」が読み取れると思われる。本稿では、3つの玉の発生・展開・変容を示す、「日本のビーズ・玉概観図」（図1）と、「古代ガラス分類・出自図」（図2）にもとに、「隠された論理」を探ってみたい。

概観図（図1）は、アイヌ玉の地域と琉球玉の地域を、図の上下に丸角四角で示し、本州・九州を中段に二つの太めの丸角四角で示す。アイヌ玉に関係の強い江戸・畿内を右側、また、琉球玉や勾玉に関係の強い九州・畿内を左側とする。4つの丸角四角は左から右に歴史の経緯を示し、楕円形はリージョナルな関連地域を描く。分類・出自図（図2）は、組成によるガラスの種類を示し、図1にも {①

～⑥} を記した。

## 1 アイヌ玉のイメージと集積メカニズム

### (1) アイヌ玉のイメージ

アイヌ玉とは、宗教行事や通常行事のためにアイヌ人が用いた玉である(加納, 2011, p. 133)。中国玉でも江戸玉でもアイヌ地域に流入しアイヌ人が用いられれば、アイヌ玉とされる。北海道で続縄文時代の遺跡、および擦文・オホーツク文化期(ほぼ7～12/13C とほぼ5～9C)の遺跡から(ガラス)玉が出土する。これらの古代玉とは別におもにアイヌ玉は、18～19世紀初めにアムール流域との交易や先住民サンタンとの交易による古い玉や、江戸期に流入した江戸玉や摂津玉であり、図版②～⑨はアイヌ玉のイメージを伝える。19世紀にシベリアやアラスカ、そして北米の先住民は、鉛なし青の小ビーズを求め(加納, 2011, p. 125)、ビーズはエスキモーの子供靴を飾る(図版①)。

アムール川交易で大陸から流入した玉には、不透明で薄緑や透明で青などの素朴な中国玉がある(図版②③)。対照的に、浅葱色の「古渡り」の例外的に美しい蜜柑玉もあり、著名なアイヌ研究家が長く所有した玉である(図版⑤)。

19世紀に入って持ち込まれた江戸玉には、不透明な、青の大玉や白の大玉(図版⑦)、逸品とされる青の蜜柑玉(図版⑤右)、わずかながら赤玉、また、朱の流水紋玉、短冊玉(図版⑧)があり、江戸中期に法隆寺玉が作られた(図版⑥)。

### (2) 北海道で出土した玉と古いアイヌ玉

北東アジアの北方民族に首飾りを身につける習慣が広く見られ、交易を通じてガラス玉とともにアイヌの人々へ伝わった。首飾りは、樺太アイヌでは江戸初期(1615～24年頃)に用いられ、北海道では江戸末期に普及した(図1、丸角四角、上と中段右参照)。

北海道では玉需要・製作は続縄文時代(ほぼ3BC～7C)に始まり、とくに15世紀以降、アイヌ墓に「少なからざるガラス玉」が埋葬さ

れた。出土した最も古いガラス玉は、碧玉製「管玉」(勾玉の項参照)とともに出土した青色「小玉」2点で、古い続縄文時代に属する。続縄文時代の12遺跡、擦文時代の6遺跡からガラス玉が出土する。青色単色で径1 $\frac{1}{2}$ 以下の小玉が多い。1遺跡から出土する玉はほとんどが1～2点で、多くて30点に限られ、アイヌ期のタマサイに比較し数は格段に少ない(関根 a, p. 127)。

出土した古代のガラスは材質の点でカリ系ガラス{③, 図2参照}である。本州で3世紀後半から10～20%の酸化ナトリウムを含むソーダ灰ガラス{⑥: 高アルミナ・ガラス、インド系など}が多いのに対し、北海道でソーダ灰ガラスが発見されるのは10～12世紀からである。

11世紀には穂香堅穴群(根室市)出土のガラス玉は鉛ガラス{①: 中国、日本ではおもに7C～}を主体と、10～12世紀を境に北海道に流入するガラス玉が大きく変化した可能性が高い。穂香堅穴群はやや小さめのガラス玉57点と翡翠製勾玉1点(翡翠については3参照)などが連なって出土し、繋ぐと29 $\frac{1}{2}$ となる。ガラス玉の出土数は群を抜いて多く、連であるタマサイに最も近い。北海道で勾玉が出土した珍しい例であり、北陸などとの交易を推測させる。

アイヌの人々が居住した青森県では、古代末から中のガラス玉34点が5遺跡から出土し、14～15世紀前半の十三湊遺跡(津軽平野北端)で5点の青色小玉(5 $\frac{1}{2}$ 前後)が、また、代表的な戦国城館である他の3遺跡から21個のガラス玉と溶着ガラスが出土した。鍛冶・鑄造関連資料や融解したガラス玉や融解ガラスも発見された。アイヌ向けにガラス玉の再加工されていた可能性はきわめて高い(関根 b, p. 331)。

北海道で最も古いタマサイは、15世紀頃のアイヌの墓(余市町大川遺跡)から出土した2連であり、1つは紺や青などの小玉を90粒ほど繋ぎ、もう1つは赤や黄などの小さな蜜柑玉とさらに小さい粟玉を繋いでいる(資料館, p. 2)。タマサイが副葬されるのは15世紀以降とされ、時期の比定できる4例でガラス玉は814

個を数え、丸玉・ひら玉の他にも多様である。16～17世紀と比定できる10例では、ガラス小玉を中心に50～500個ほどが出土した。

シトキとは、アイヌ玉の連でトップにつける金属飾り（図版⑨）であり、16世紀に専用のシトキが出現した可能性が高い。初期段階では吊り下げる穴がつけられた円形の金属板にすぎなかった。北方民族資料館の所蔵する古いシトキの連19例は、アイヌの人々の手で作った自製品であり、「飾り板」に銀やブリキで九曜紋状（中心と8つの丸）をはめ込んである（資料館、pp.11-13）。シトキは、交易における対価や漁場での労働報酬として支払われた。出土17例のうち4例しかシトキをもたず、伝世品にみられる巴紋など文様のシトキ（図版⑨）が登場したのは18世紀以降であり、多くは19世紀に入ってからである（関根 a, p.144）。

タマサイの出土品では、小玉がガラス玉全体の8割前後を占め、大玉（2<sup>センチ</sup>以上）は見られない。伝世品では中玉（1～2<sup>センチ</sup>）が全体の7割を占め大玉も1割弱存在する。18世紀以降、ガラス玉の大型化が急速に進んだ。

出土品では多色な玉（トンボ玉）は15世紀に多く、16～17世紀になると青系、緑系のガラス玉が非常に増え確立した。その後、18世紀末から19世紀に、アイヌ玉は再び多彩になった（関根 a, p.145）。トンボ玉の増加、シトキへの加飾、大玉化は18～19世紀に発生し、日本とロシアの緊張関係のなかで蝦夷地への日本の関心が高まった時期であった。和人の蝦夷地への進出が、タマサイを華美なものとしたのである。

### （3）アイヌ社会の変容とアイヌ玉

18世紀になると、松前藩はそれまでの商場方式に変え場所請負制を実施し、これに伴いアイヌ交易や蝦夷地漁業を場所請負人が独占し、利益をあげるため収奪行為が日常化した。18世紀半ば以降、北前船が近世初期の近江商人集団の荷積船に代わり（大塚、p.44）、17世紀末に昆布、18世紀に干しあわび・いりこが公式の中国輸出海産物となった。本州との交易の対価として、シトキや多数の玉が持ち込

まれのである。

海浜や川筋に沿って形成されていた強固なアイヌの集団組織は弱体化し、アイヌ社会の共同体的集団は崩壊した。和人の請負商人はアイヌの個人を対象にして代金を支払い、家族単位で財貨が蓄積された（大塚、p.39）。19世紀に入ると、アイヌ向けの比較的大きい乳白色をおびた青色の玉（図版⑦）が、漆器とともに北前船で運ばれ、家族単位で「集積」されたのである。

大玉化・「集積」前の17世紀半ば、アイヌ社会を探訪した記録によると、「だれかの首のまわりにガラス玉をかけてやる」と喜んで笑った。女たちは「装飾のついた麻の粗い長い」服を着ていたので、水色の玉飾り三連と交換した（北構、p.69）。銀をどんなに提供されても鉄を扱ひ、鉄が得がたいことを意味した（北構、p.153）。

大玉化・「集積」後の江戸後期末に探訪した記録によると（出版1893年、探訪者 [1775～1864] は著者の祖母）、アイヌの人にとって、数個のガラス・ビーズ、銀のコイン、光るなにかは幸せにする。熊、狐、狼、アザラシの高価な毛皮が、「ほとんど価値のない数個のガラスと交換され、貴重な毛皮の財産を一对のブリキ耳飾りに用いる」（Landor, p.248）。また、アイヌの少女にとって首飾りは、生涯における夢である。新しい首飾りをつけたときの喜びは、ビーズの大きさと数に比例する。特別に大きなビーズを1つ有する女性は、近隣女性からねたまれる。人より多く玉をつけたがるのは、好きという以外の理由では説明できない。アイヌ社会では、衣服着用を定める規制はないと伝える（Landor, p.250）。

### 2 日本古代の勾玉

勾玉は、日本において縄文時代に出現し、玉のすべてが姿を消す中世まで存続した。はじめに述べたように、沖縄では石製の勾玉が2つの形で用いられている。勾玉は、(i)巫女が背に着ける装身具玉ハベルのうち、ガラス小玉で編まれた板状部分から伸びた紐の先に付けられている。(ii)透明な玉（水晶）を

繫げた玉ガーラにも、一つか数個、ときには十個ほどが付けられている。他方、「琉球玉」は、(i)玉ハベルのほか、(iii)御玉貫では、スズの瓶を覆う形で編まれ琉球王家の紋章を描く。(iv)六角瑠璃玉蓋(既出)や南京玉盆(県立博物館所蔵)など、ビーズ細工品に用いられた。ビーズ細工の小燈籠2つは17世紀半ばに(1649年と53年)に琉球使節が奉納し、東照宮に納められた(『報告書』, p.26)。17世紀の御玉貫と同じ小玉が同じように編まれた。この時期に、長崎ガラス(ビイドロ)の製作が始まり、17世紀後半にはオランダや中国からガラスが大量に輸入された。

古代の勾玉研究(図1 丸角四角、下と中段左参照)は、沖縄の勾玉検討の基準を提供する。

(1) 交易のなかの勾玉(翡翠・ガラス)

月の光明を青色と信じた太陰崇拝の民の間で鮮やかな緑や深い緑色の硬玉製勾玉が神聖

視され、江戸時代に国学が起ると、好事家の間で出土品の勾玉が人気となった(水野, p.204)。勾玉は、縄文時代に石器時代の形を継続し、大半は頭尾同大で半月形の曲線をもち、材質は硬玉製であった(水野, p.207)。勾玉の材質は、硬玉、軟玉の他に、ガラスが存在した(図1、中段左の丸角四角で、勾硬と表示)。なお、硬玉は本翡翠(jadeite, ジェダイト)のことで、新潟県姫川やミャンマーなどで産出する。jade(ジェイド)も翡翠と訳され、硬玉、軟玉、璧玉が含まれる。

ガラス勾玉は、ガラス製の小玉(7~10<sup>mm</sup>ほどまで、それ以上は丸玉、微小は粟玉とも言う)や細長い管玉について出土例が多く、弥生中期(ほぼ2BC~1C)に出現後、弥生後期(ほぼ1~3C初め)、古墳時代から奈良時代まで作られた。古代の勾玉、管玉、小玉のイメージは『和ガラスの心』(MIHO MUSEUM)に詳しく、『世界のトンボ玉』(谷一・工藤著)も記載する。

図2 古代ガラス分類・出自図

	代表的な例や産地	特性と関連事項
<b>●鉛ケイ酸塩ガラス</b>		
①鉛ガラス	中国3~2BC、6C末~漢、隋	7C飛鳥池 日本60~70%, 5C朝鮮
②鉛バリウムガラス	中国戦国(5~3BC)~西晋(3C)	西アジア 33~40%低鉛系も、BC8~1C 中国古代ガラス 漢青で 朝鮮BC2~3C 合松里(BC2前半)で出土
<b>●アルカリケイ酸ガラス</b>		
③カリガラス	インド~東南アジア	古代、紺色透明 コバルトで着色
カリウム(K <sub>2</sub> O)融剤	ここを経て日本に多	古代、淡青色透明 銅で着色
④ソーダ石灰ガラス1	西のガラス、地中海	天然ソーダ(ナトロン)、ナイル川流域から得て
(ナトロン・ガラス)	ローマン・ガラス	国家専売品にも アンチモンで着色
⑤ソーダ石灰ガラス2	西アジア(メソポタミア	地中海沿岸や砂漠の植物の灰を用いて
(植物灰ガラス)	・ササン)	BC8からは、ナトロン入手
⑥ソーダ石灰ガラス3	アジアのガラス インド	酸化アルミニウム(AL <sub>2</sub> O <sub>3</sub> )多い・CaO小
(高アルミナガラス)	パシフィック・ビーズ	銅のコロイド着色 赤褐色はムティサラ
④~⑥ソーダ(ナトリウム)を融剤		(↑ジャワで)

(注) 各ガラスの番号は本文及び図1に対応。

(出典) 肥塚他「材質とその歴史史的変遷」、『月刊文化財』, 平成22年 No. 11, p. 13

及び 谷一・工藤『世界のトンボ玉』, pp. 94-97などから作成。

勾玉には、形態によって呪術性での序列があった。①定形式勾玉、②定形式丁子頭、③

不定形勾玉、④不定形丁子頭勾玉、⑤半珠状勾玉(環の一部が切れた形の中国玉器を半分

に)⑥異形勾玉の6つに分類され(藤田, p. 44)、定形式丁子頭勾玉(参考図「勾玉種類のイメージ」参照、左端は明確な頭部を持つ。図版⑩右2つ、古墳時代の勾玉は不定形式)は少なく特殊な性格が付与された。定形式は亜定形式より政治的抽象性において優位にあり、丁子頭勾玉はそうでないものより呪術性において優位にあった。ガラスは、一般的に石を「補うもの」として出現した。大陸文化の積極的導入、新技術での製作を考慮すれば、当時、ガラスは「単に補う存在」ではなかった(藤田, p.63)。

弥生時代において、中期にガラス製勾玉と硬玉製丁子頭の大きな勾玉が現れ、中期から後期にかけて定形式勾玉の基本形態である丁子頭勾玉が成立した(水野, p.214)。両面穿孔で磨かれ、時に三條などの平行線が頭部に彫られた。

弥生中期ガラスの勾玉は、福岡県で17例が出土し、定形式、不定形式とも弥生中期後半には福岡県の三雲南遺跡と須玖岡本遺跡に集中した。17例のうち定形丁子頭は1個、不定形丁子頭も1個に限られ、丁子頭勾玉は特殊な性格をうかがわせる(藤田, pp.58-59)。

弥生後期ガラス勾玉は41~42例が出土し、四国を除く畿内以西に分布した。北部九州と京都府北部に中心があり、京都府北部では様々な形態の不定形なガラス勾玉が出土した。41~42例のうち定形式丁子頭勾玉は、福岡県岡本遺跡で発掘された1例(全長48<sup>3</sup>mm)に限られる。定形丁子頭勾玉は、弥生中期以来、伝統的に福岡県須玖岡本遺跡群内で製作され、政治性と宗教性を保持したと考えられている。また、福岡平野の政治文化圏内にあった佐賀県鳥栖の遺跡には、福岡県須玖岡本遺跡で製作されたガラス勾玉が持ち込まれた。須玖岡本遺跡は、広域連合体の精神的統一を象徴し政治的最高レベルを示す定形丁子頭を製作し、他には配分しなかった。

ガラス製勾玉は、南朝鮮の楽浪文化を指向する価値観にもとづき製作された優位の勾玉であった。須玖岡本周辺の人々は定形勾玉のほとんどをガラスで製作し、鑄造過程で勾玉

細部の形態に厳密な注意を払った。定型形式の完成はここで遂げられた可能性が極めて高く(藤田, p.62)、福岡県三雲南小路で出土したガラス勾玉は亜定形勾玉に限られたのである。

新たな巻き技法の習熟によって細身小型菅玉も完成し、政治的・宗教的権威をもったガラス勾玉と結合して、一段とその社会的な意義を高めた。高い意義のゆえに、ガラス勾玉の製作や配布は鏡の配布より政治的に限定された。

## (2) 勾玉と古代のリージョナル関係

古墳時代(ほぼ3~7C)に翡翠の勾玉は、資源とリージョナル関係のなかで大きな変化に直面した。硬玉製勾玉は古墳時代に入る前に減少し、碧玉が利用され始めた。硬玉(翡翠)の産出が減少したか、輸入の硬玉が途絶えたためである。翡翠の産地近く(新潟県姫川周辺)の、硬玉製勾玉の玉作り遺跡では、伝統的な技術で外国産の良質な硬玉を加工し、製品を北九州方面に移出したと考えられる。それゆえ、出雲の玉造遺跡では、碧玉やメノウの攻玉は行ったが、硬玉の攻玉の形跡はない(水野, p.251)。

輸入硬玉は、弥生時代の前期(3BC)と中期には認められ、弥生後期、古墳前期(ほぼ3~4C)に減少した(図1:南朝鮮・華南との交易[曲線で表示])。魏との交易も266年以降途絶え、512年に晋に朝貢するまで交易は途絶えた。古墳中期(ほぼ5C)には中国南朝との交易は続き、中国南部からの硬玉原石が持ち込まれた。しかし、5世紀の南朝との交易中断に関連し、古墳後期(6C後半~7C)に日本でも南朝鮮でも硬玉製勾玉の使用は途絶えた(水野, p.252)。

4世紀中ごろ畿内では鉄製品の激増が見られた。4~5世紀の南朝鮮への進出により5世紀中ごろまでに大量に鉄を獲得し、武器や工具に加工した。しかし、南朝鮮経営に衰退の兆しが現れた5世紀末から6~7世紀に鉄は激減し、南朝鮮で発見される翡翠勾玉の出土は増加した(水野, p.271)。大和朝廷は、日本以外では産出しない硬玉(翡翠)勾玉を鉄の見返りに

輸出し続けた。しかし、562年に任那が滅亡し南朝鮮で大和朝廷が力を失うと、翡翠は務めを終え(図1:六角形参照)、7世紀以降、歴史から消えた。

ガラス勾玉は、既述のように弥生中期(ほぼ2BC~1C)に出現し製作されたが、中国で生産された原料ガラスを再溶解しこれを用いた。日本で原料からガラスを生産し製品にできたのは6世紀前半であり(藤田, p.30)、材質はアルカリ石灰ガラスであった{⑤}。奈良時代に鉛が精錬されると、奈良県飛鳥池で鉛ガラス{①}が生産され、これを用いた製作が可能となった。

玉を着ける文化は古墳文化の終焉とともに廃れたが、管玉や丸玉と異なり、勾玉だけは神聖視され永く製作された(水野, pp.274-5)。とはいえ、7世紀に硬玉(翡翠)が消えるとともに、勾玉は急激に使用が減った。8世紀奈良時代に勾玉は、東大寺の法華堂本尊などに用いられたが、古墳時代の勾玉が転用されたのであった。

韓国南部の慶州の考古学博物館を訪れると、金冠塚出土の金冠(5C後半)は、金飾りと35個ほどの緑の勾玉でまばゆく輝く。この塚から4.5キロ分の金飾りや2万のガラス小玉が出土した(Nelson, p.251)。他にも、金飾りやガラス玉の連についた無数の勾玉に圧倒される。勾玉は、日本から輸出されたものと最近では確認されている。金冠塚の宝冠につけられた硬玉製小勾玉の形がほぼ一致するのは、同時に同目的のために一挙に製作されたことを意味し、需要に応じて交易品として輸出されたことの証拠とされる(水野, p.272)。勾玉は「呪教的意義」を脱し、「装飾的効果をねらった」と言われる。

### 3 ガラス玉・勾玉の変遷と琉球玉の検討 基準—材質と地域性

ガラスは、弥生時代前期末(3BC)から中期初頭の北部九州で最初に出現し、弥生後期から色調や玉の製法で多様化が始まった(資料館, p.13)。勾玉・小玉の材質、製法、地域性の整理は、琉球玉とアイヌ玉の検討基準を示

す。

弥生時代では、前期末~中期中葉(3~2BC)までガラス製品の出土は北部九州に限定された。中期後葉にはガラス類の流通が瀬戸内や近畿周辺で確認され、流通するガラス製品に地域差が生じた(図2「分類・出自図」、{①~⑥}参照)。鉛バリウムガラス{②:中国で3~2BC, 7C~}の管玉は、北部九州に引き続き流通が限定された。他方、銅着色のカリガラス{③:インド系や東南アジア系}の小玉は、近畿周辺や瀬戸内で多く出土した。流通量は少ないが、北部九州を介しない対外交渉が開始された(肥塚他, p.23)。

弥生時代の後期前葉(ほぼ1C)には、カリガラス製{③}の小玉の流通が激増し、北部九州の中心部と、丹後半島などの近畿北部が出土の核であった。前者ではコバルト着色がやや優勢であり、後者では銅着色が90%前後を占めた。こうした違いは、2つの地域が独自に対外交渉を行い、アジア地域のガラスであるカリガラス{③}が流入したことを示す。

沖縄本島で出土したガラス小玉は、最初の流入期で、ほぼ1世紀のものと考えられ(肥塚他, p.23)、弥生時代平行の貝塚時代後期に出土例がある。埋葬遺跡数2で弥生後期ガラス小玉5個が出土した(藤田, p.132)。北海道では続縄文時代(弥生・古墳・奈良時代の一部)に出土例があり、遺跡数12でガラス小玉105個が出土し沖縄よりも多い。ガラス小玉は福岡、佐賀、長崎で4072個、1万4604個、1万5324個が出土し、普遍的な存在として北部九州を中心に全国に流布し、小数が沖縄に及んだ(藤田, p.140)。

後期中葉~後葉(ほぼ2~3C初め)になると、二つの地域性は維持されたが、流通するガラス製品の構成は変わった(肥塚他, p.24)。北部九州では、高アルミナ・ソーダ石灰ガラス{⑥:インド・パシフィック・ビーズ}の小玉が、中葉の出現後に急速に普及し、カリガラス{③}より優勢となった。他方、近畿北部周辺ではカリガラス{③}の小玉の流通が激減し、漢青(主成分、ケイ酸バリウムの中国古代の青色顔料)で着色の鉛バリウムガラス{②

：中国で戦国玉など5BC末～3C末}の管玉が流通し出土した。

古墳時代前期（ほぼ3～4C）には、日本列島内でガラス玉生産は非常に低調であったけれども、鑄型を使用し異なるガラス小玉の製作が開始された（肥塚他，p.29）。鑄型は板状の土製品で片面に半球上の型孔を多数配列し、芯棒を立てる小孔があり、溶解ガラスの表面張力を利用し一度に多数製作した。ガラス小玉の鑄型は、特別な装置も技術を必要とせず、住居跡などから単独で出土する。しかし、未加工ガラスの流通は確認されず、素材は舶載ガラス製品、とくに圧倒的にガラス小玉が溶解されて使用された。

ガラス小玉の鑄型は、古墳時代前期には北部九州と関東周辺に確認され、中期以降奈良時代には畿内に集中した。同時に、鑄型は朝鮮南部で増加し、古墳時代前期並行期かわずかに先行した。鑄型による再生技法は、朝鮮半島から伝播したのである（肥塚他，p.31）。

古墳時代中期後半～後半ばには、畿内以外で北部九州周辺にガラス小玉が再び直接流入し、流通量では畿内に劣らなかつた。百済で鉛ガラス {①} の製造が始まり、製品が北部九州へ直接大量に持ち込まれた。古墳中期（ほぼ5C）に日本で勾玉、管玉など生産量は増加したが、舶載ガラス小玉を利用した二次的な製作であった。

7世紀初頭から鉛ガラス {①} の流通が再開し、大部分が径8<sup>mm</sup>以上の比較的大型のガラス小玉で、若干の勾玉も含まれた。ガラス棒を熱して柔らかくし軸に巻く、巻きつけ技法で製作した。7世紀半ばまでの遺構から出土する鉛ガラス製品 {①} は、朝鮮半島南部で生産された鉛ガラスを使用した（肥塚他，p.33）。

7世紀後半に奈良県飛鳥池遺跡が成立し、鉛ガラス {①} の生産が日本で開始された。これ以降、鉛ガラス製品は、日本産の鉛使用に急激に転換した。ガラスの一貫生産の開始も、ガラス製品が稀薄な平安時代に続くことになった。

#### 4 勾玉とガラス小玉でみる琉球と大和

琉球では、巫の持ち物として勾玉が尊重され、大型の碧玉製勾玉が出雲玉造部の製作品を移入して、「のろ」の勾玉として伝世使用されていた（林，p.253）。また、尚氏の家紋「左三つ巴」は、3つの勾玉を巴に組み合わせであり、琉球と勾玉との関係は強い（吉見・福，p.122）。

1984-86年の調査で200点以上と他400点、08年の調査で5000点以上のガラス玉が出土した。貝塚時代後期、弥生平安並行期の宇堅貝塚からガラス丸玉が出土した。勾玉は、今帰仁城跡、勝連城跡、首里城跡の京の内地区など12地区で出土し、うち7地区で13～15世紀の層からガラス製と石製、4地区で石製が出土した。玉は8～10世紀の層から出土し、この頃に勾玉が移入された（『報告書』，p.159）。

今帰仁城跡と勝連城跡では、勾玉の他にガラスの管玉や丸玉も出土した。首里城二階殿でも勾玉（ガラス製と石製）が出土し、京の内では溶着したガラス玉が出土したが、1459年の火災で溶着したと考えられている。沖縄で出土した小玉は径2～10<sup>mm</sup>程度で、多くが巻きつけ技法で製作され、劣化で螺旋状の筋が認められる。ただし、ガラス玉を製作するための芯棒や坩堝、炉跡などは確認されていない（『報告書』，p.161）。

16世紀後半や17世紀には、琉球で大和の玉を好んだ風潮があった。17世紀前半に編纂された「おもろそうし」は、12世紀から17世紀の古歌集を集成し（吉成・福，p.10）、大和に出かけて玉（勾玉あるいは水晶玉）を持ち帰るとい詩が含まれる（『報告書』，p.30）。16世紀後半に八重山では、上下の身分に関係なく女性が玉を飾るため大和から買い求める者が多いため、1696年に玉の過剰な取得を禁止した。しかし、玉を過剰に飾りたてる流行は止まらず、1704年に再度、八重山番所は玉の売買を禁止したという。宮古でも過剰な飾りたてが禁止された。一般女性は、のろが用いる勾玉でなく水晶玉やガラス玉を求め、交易規模は別に、18～19世紀のアイヌによる江戸玉の「集積」を髣髴とさせる。

勾玉は（ii）玉ガーラと（i）玉ハベルに

付けられ、玉ガーラの水晶の数珠に勾玉を1個か数個(2~3個)を配し、21個の小勾玉に大きな丁子頭形勾玉を配した(『報告書』, p.44)。

のろは、勾玉のついた玉ガーラで身を飾った。琉球国時代に国王から辞令を受けて任命されて地方に配置され、俸給を得て生活する「神女組織」であったが(吉見・福, p.51)、琉球王国が解体されると職を失った。1880年(明治12年)にのろは22人で、地方の女神官は230人、合計252人がいて(『報告書』, p.32)、1人1連として250連ほどで、勾玉はこれよりやや多く存在した。アイヌ玉の連に比較し著しく少ない。

(i) 玉ハベルは、奄美諸島などののろが首から背中に掛ける。これは、下辺に下げる三角布(ハベル)、水晶玉を繋いだ玉ガーラに相当する部分、本体頂点部に取り付ける折り返し耳に綴じた勾玉からなる。細長い部分は、舶来の小粒硝子玉を編んで美しい模様を表わす。最近の調査で伝来の8例のみ確認され、奄美大島や沖永良部島に偏在する。奄美は1609年薩摩の直轄となり、王府による神女任命制は廃止された。薩摩は認めたが、王府の中央集権的な神女祭祀は大きく変容し、玉ハベルは奄美の「変質した神女祭祀」の持ち物であった(『報告書』, p.12)。

ガラス小玉は、(iii) 御玉貫と(iv) ビーズ細工の工芸物に用いられた。御玉貫は、孔を穿った玉を糸などに貫き綴って作る細工物であり、ガラス小玉を糸で綴った表面を覆い飾ったスズ製瓶子(くちが細い小型の器)をさす。緑玉を地として胴部に黄色で王府の紋「丸に三つ巴」を表わす。報償として下賜され、確認されたものは9例に限られる(『報告書』, p.20)。これらは、16世紀末から17世紀頃に製作された。

御玉貫は、金奉行管轄下の玉貫工が製作した可能性が高い。1705年の文書には、功績に褒美として与えられた小玉1貫、6027粒のうち黄色829粒などと記載される。尚寧王のもと1592年に、金奉行のもとに玉貫工が組織された。御玉貫と製作技術が16世紀後半に首里王府内でみられたと推定される(『報告書』, p.62)。

各色のガラス小玉を分析すると、王府内の工房で一括的に製作されたわけでない。

玉貫工の仕事は、溶解ガラスから芯棒を抜くことと、既製のガラス小玉を編み上げることとも理解される(『報告書』, p.18)。ガラス小玉の製作も、糸で小玉の孔を貫き編み上げとも考えられる。また、出土ガラスの多くに鉛ガラス{①}が使われ、一部は別のガラス玉が使われた(『報告書』, p.76)。東照宮伝来燈籠の化学分析資料5点で4点が華南産、1点が華北産の鉛を用いていた。琉球王国が中国産ガラス玉を入手し、組み上げたと推定できよう。

確かに、首里城京の内跡から出土した大量のガラス小玉に象徴される中世の玉が使用され、16世紀後半に御玉貫の使用が確実視され、日本よりはるかにガラス玉の需要が高かったことから、首里城王府の膝元でガラス小玉の製作が主体的になされた蓋然性は高い(『報告書』, p.64)ともいえる。ただし炉などは出土しておらず、ガラス小玉の使用数は少なく、多く使われた鉛ガラス{①}の原産地は中国や朝鮮である。このため、アジア地域から小玉を入手し、編み上げなどを工房で行ったと考えられる。

#### おわりに

19世紀に江戸でガラス製作が広まり、江戸の人々は、アイヌ地域に交易で持ち込まれる江戸玉を愛好した。17世紀半ば琉球王府がガラス小燈籠を奉納したときの貴重性はガラスにはなかった。

「御玉貫」などに用いられた琉球玉は、極少数者に下賜され、限定性のゆえの希少性を前提に特定の人たちの間に「沈潜」した。希少性を前提に王宮工房でガラス小玉が生産されたとしても、多くは生産されなかったし、中国やアジア地域から小玉を入手し編み上げもありうる。

琉球玉の「沈潜」は、勾玉が宗教関係者に下賜された相続にも認められる。古代に小玉・管玉と異なり「勾玉だけは神聖視され永く製作された」。勾玉の特性は、沖縄では「宗教的権威」を今日まで持続し、限定性を持続し



た。

人びとのガラス玉への切望も、17世紀に玉の過剰な取得として禁止され、同時に、規制を緩和させるだけの独自の資源、アイヌ社会の海産物に該当する資源を持たなかった。

琉球をとりまく東南アジアのビーズ文化を、琉球玉は志向しなかった。康熙帝（在位1662～1722）が設立した宮廷工房は、西欧の指導のもと鉛なしの近代ガラスを製造し、乾隆帝（在位1735～1795）は、官吏と家族へのビーズ着用規定によりガラス製造を保護した（加納, 2011, p. 110）。高品質の乾隆ガラスや乾隆玉が完成し、また、清朝玉も東南アジア市場に浸透し、アラスカや北米に広がった。

琉球玉は、「貴重性のゆえに限定性」にもとづき、清朝玉と相違し、同時に、人びとの不滅と護符を願って好んだ東南アジアのビーズ

文化とも異質であった。特定の琉球社会に「沈潜」した。

他方、アイヌの人々は青い玉を、不滅と護符を願うシベリア・北米の先住民と同様に愛好した。極めて不利な交易条件であっても交易資源がある限り、アイヌ玉を「集積」できた。アイヌ社会には、玉の着用を制限する「規制」も「統治主体」もなかった。さらに、19世紀から交易の富は、共同体的集団を崩壊させ、「家族単位」での「大玉化・装飾化」を促進した。

交易の富の消滅後、鯨漁の新たな富は和人の網元に集積した。鯨御殿には、つや消し「日輪」モチーフの希少な清朝玉（図版②左）が飾られ、これと対照的に、アイヌ社会に「集積」していたアイヌ玉は流出し、和人の収集家や博物館に「集積」されていったのである。

## 引用文献

- 大塚和義編著、2001、『ラッコとガラス玉』、国立民族学博物館。
- 沖縄県教育委員会編、2011、『沖縄のガラス・玉等製品関係資料調査報告書』。
- 加納弘勝、2005、『旅する人の地域研究—ビーズ・織物・影絵の語る現代世界』 文化書房博文社。
- 、2011、『世界のビーズ・地域の織物—人びとの願いとアイデンティティ』 文化書房博文社。
- 北構保男、昭和58年（1983）、『一六四三年 アイヌ社会探訪記—フリース船隊航海記録』 雄山閣出版。
- 関根達人、2008a、「タマサイ・ガラス玉に関する型式学的検討」、樟森・小口・澤登編、『東北アジアのなかのアイヌ世界—アイヌ文化の成立と変容—交易と交流を中心として』（下）、pp. 125-150、岩田書店。
- 、2008b、「本州アイヌの考古学的痕跡」、樟森・小口・澤登編、『東北アジアの——』（下）、pp. 317-344、岩田書店。
- 東京国立博物館、平成4年（1992）、『東京国立博物館図版目録・アイヌ民族資料編』、東

- 京国立博物館。
- 谷一尚/工藤吉郎、平成18年（2006）、『世界のトンボ玉』（改訂新版）、里文出版。
- 函館市北方民族資料館、平成19年（2007）、『タマサイの美—函館コレクション』。
- 肥塚・田村・大賀、平成22年（2010）、「材質とその歴史の変遷」、文化庁長文化財部監修『月刊文化財』、平成22年11号、No. 566, pp. 13-23。
- 藤田等、1994、『弥生時代ガラスの研究—考古学的方法』、名著出版。
- Miho Museum、平成18年（2006）、『和ガラスの心—勾玉からびいどろ・ぎやまんまで』。
- 水野 祐、1992、『改訂増補 勾玉』、学生社。
- 吉成直樹・福寛美、2006年、『琉球王国と倭寇』、森話社。
- Landor, A.H.S., 1893 (2012), *Alone with the Hairy Ainu. or 3,800 Miles on a Pack Saddle in Yezo and a Cruise to the Kurile Islands*, Cambridge University Press.
- Nelson, S.M., 1993, *The Archaeology of Korea*, Cambridge University Press.

（本学教授）